

## 徳島県上勝町・神山町の民間主導による地域活性化事例

2014年11月19日から2日間の日程で、「地域活性化事例視察会」（主催：地方シンクタンク協議会）に参加し、徳島県の上勝町・神山町を視察する機会を得ました。上勝町は高齢者が生き生きと働く「葉っぱビジネス」で、神山町は外部人材の積極的な誘致で、それぞれ活気づいています。地域資源を有効に活用し、民間主導で交流人口増加・定住促進に取り組む両町の事例を紹介します。

### 1. 株式会社いろどりの「葉っぱビジネス」（上勝町）

大阪・京都から徳島駅まで高速バスで約3時間、そこから車でさらに約1時間。徳島県上勝町は、町域の約9割を山林が占める山あいの町で、高齢化率は徳島県内で最も高く、50%を越える。

そんな過疎地の町が、過去10年間のうち5か年で社会増（転入者が転出者を上回ること）を記録した。その秘密は「葉っぱビジネス」。日本料理等で添えものとして用いられる季節の花や枝葉を出荷する「彩事業」の通称である。高齢者が生き生きと働くその姿はドラマ化・映画化され、同町には海外からも報道陣や視察団が訪れる。

「葉っぱビジネス」の立役者が、同町出資の第3セクター・株式会社いろどりの横石知二社長。農協職員として同町に赴任し、農業振興に奔走していた横石社長は、ある日大阪の料理屋で料理に添えられたモミジの葉を、若い女性が大切そうにハンカチに包んで持ち帰る光景を目にする。

これがきっかけとなって、地元農家に呼びかけ1986年に開始した「葉っぱビジネス」だが「初めは散々。『葉っぱがお金に化けるなんて、阿波の狸じゃあるまいし』と地元からは馬鹿にされ、出荷しても値がつかず赤字続き」だったと振り返る。

しかし横石社長は諦めず、主婦や高齢者に声をかけて生産を促す一方、自腹で高級料亭に通い詰り、料亭のニーズを丹念に調査。取組みが実を結び、徐々に買い手がつき事業は軌道に乗った。

2002年、株式会社いろどりの取締役就任し、2009年から現職を務める横石社長は、「人は誰でも主役になれる」と語り、自身は脇役に徹する。「葉っぱビジネス」の主役はあくまで高齢者等の生産者である。

横石社長は、早くからIT機器を活用し、出荷・受注業務を効率化する一方、受注状況の「見える化」を進め、生産者のやる気を刺激することで生産量の拡大と高品質化を実現した。始めた当初は4軒だった生産者は現在約200軒で、年間販売額は2億6千万円に達している。

生産者の一人、西蔭幸代さん（77歳）は「この仕事が生きがい」と笑顔で話す。自宅に設けた作業場にはパソコンが置かれ、これで「いろどり」が発信する市況情報や注文を確認。朝早くに季節の花や枝葉を摘み取り、選定してパック詰めし、自身の運転する軽トラで午前中には出荷場に持ち込む。出荷される商品はバーコードタグで管理され、「いろどり」を通じて売上情報が還元される。

講話する横石社長（右）



料理を彩る、季節の花や枝葉（左）

タブレット端末で受注を確認する西蔭さんといろどり職員（右）



料亭が求める形や色の揃った葉を選ぶ（左）

## 2. NPO法人グリーンバレーの「創造的過疎」戦略(神山町)<sup>かみやまちょう</sup>

上勝町の北隣にある町、神山町。町域の約9割が山林の中山間地という点も上勝町とよく似ているが、両町主要部は1,000m級の山々で隔てられており生活圏は異なる。

長年人口流出が続いていた神山町も、2011年に社会増を記録し話題になった。その要因となったのは、IT企業の進出や若者の移住である。

積極的な企業・人材誘致策で同町のまちづくりを牽引するNPO法人グリーンバレーの大南信也<sup>おおみなみしん</sup>理事長は、「過疎化の現状を受け入れながらも、外部からの人材誘致により人口構成の健全化を図り、持続可能な地域づくりを目指す。これが『創造的過疎』戦略」と語る。

具体的には、本社とネットワークで繋がれた「サテライトオフィス」設置の提案、町に必要な店や職業を持つ人材を外部から指名し誘致する「ワークインレジデンス」の推進、求職者支援訓練を通じまちづくり後継者の育成にあたる「神山塾」等。地域における雇用問題に対し民間からの解決を目指す点で、従来の企業誘致とは一線を画する。

こうした取り組みを受け、町は新たな賑わいを見せている。「ワークインレジデンス」で誘致され、昨年開店した「カフェ・オニヴァ」は、古民家をモダンに改装した南フランス料理店。山の中の洒落た料理店として、町の新たな目玉となっている。

サテライトオフィスの一つ「えんがわオフィス」は、ITベンチャー・株式会社プラットイーズの「神山センター」の通称である。古民家をオフィスに改修した建物内では常時20名程度が業務に

講話する大南理事長(右)



ワークインレジデンスで誘致された「カフェ・オニヴァ」(左)

この日東京で行われていた展示会とリンクするライブモニタ(右)



(株)プラットイーズの「えんがわオフィス」全景(左)

あたり、敷地内で現在建造中の新棟では、エンジニアやクリエイターが4K・8K映像素材のアーカイブ事業<sup>\*</sup>に従事する見込みという。都市部の喧騒から離れ、自然を満喫しながら仕事ができる環境は従業員に好評で、人材確保の点からも他社との大きな差別化につながっている。

<sup>\*</sup>現行ハイビジョンを上回る高解像度(4Kは現行の4倍、8Kは同16倍の画素数)の映像素材を保存・管理する事業。

## 3. おわりに

政府では、大都市圏から地方に移転する企業に税優遇を検討する等、「地方創生」に向け本腰を入れつつある。そんな中、魅力的なリーダーのもと民間が主体となって活性化事業に取り組み、地域資源を有効活用することで交流人口増加と定住促進を目指す両町の事例は先見性に富む。先駆者の「地域のマイナス面をプラスに捉え、弱みを強みに変える」(横石社長)、「神山町、上勝町は特別ではない。できない理由より実現する方法を考える」(大南理事長)との言葉も大いに参考になる。

過疎という現実にも果敢に挑戦する両町の取り組みが、同じ悩みを抱える他の地域を勇気づけ、活性化の契機となることに期待したい。(太田宜志)

